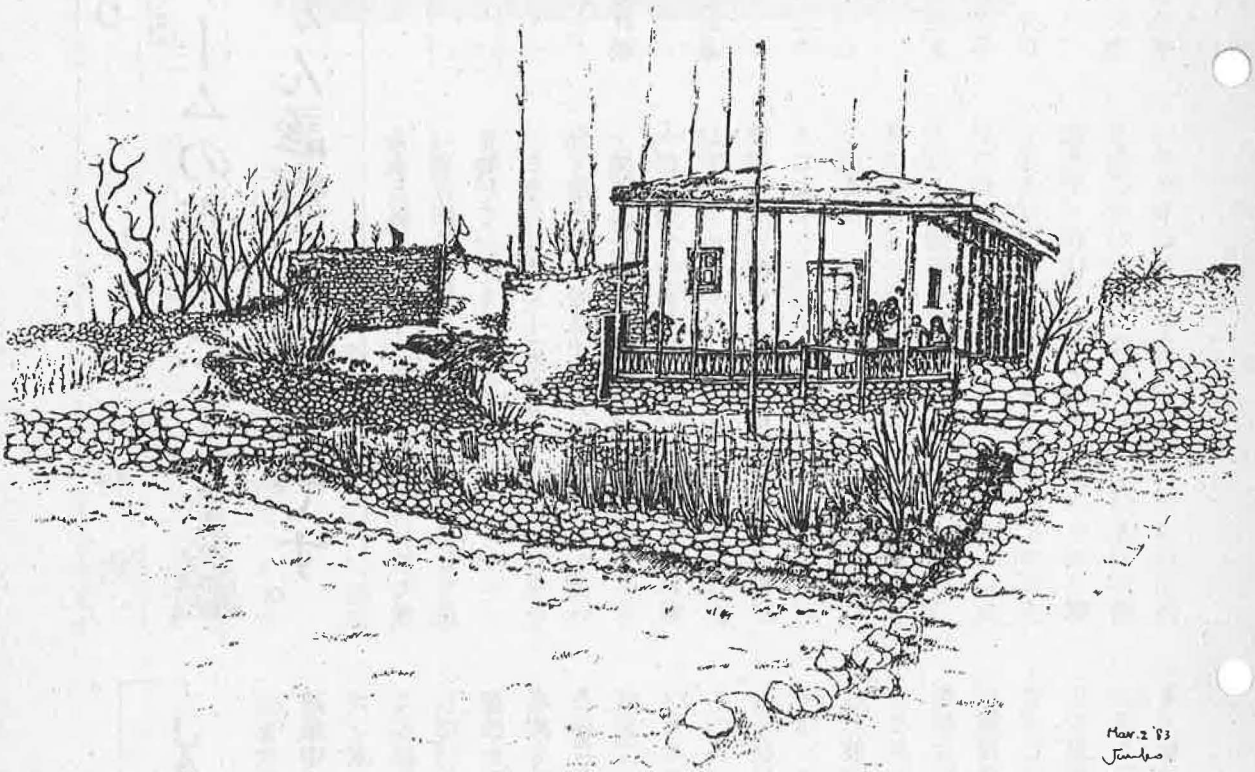
1989年 5 月 20 日　みんなで生きる　(1972年 4 月25日第三種郵便物認可)毎月 1 回10日発行

ペシャワール会報

No. 19



小さな回教寺院
パキスタン・フンザ地方
(絵・山田純子)

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

●ペシャワールからの便り

アフガン人・チームの育成と てんかん診療の準備中です。

中村　哲

内外ともに波乱含み

皆様お元気でしょうか。年度末の慌ただしい中、ペシャワール会のお仕事お疲れ様です。そちらはもう桜の花もほころんで、また恒例の花見を楽しみに、お元気でお過ごしの事と存じます。

こちらは日に日に夏を思わせる日射しで、洗濯物の乾きが早くなって参りました。しかし、夜はまだ冷え込みます。

今が最も忙しい季節で、四月九日に始まるラマザーン（断食月）の前に大抵の仕事のキリをつけておかねばなりません。先日来、医学生の鎌田君が手伝いに来てくれ、助かっております。今年は例年を遥かに上回って、外も内も波乱含みで、真面目に考えると気も狂いそうですが、ここは持ち前の怠け癖を発揮し、おつむを鈍感にして生き延びております。

さらに加えて、（妙な話ですが）「女性を外で働かせるのはイスラムに反する」という反動ムードに押されて、事務のアフガン人が休職を余儀なくされ、事務機能が麻痺してしまいました。（パキスタンの首相は女性ですが、自ら「女性は男性と握手の挨拶をせぬように」とのおふれを出しました。）

気も遠くなりそうな未決書類の山を前に、イスラムというのは日本人の我々が想像する以上に強靱な掟だということを、改めて思い知らされるこのごろです。

思えばこの一年間、情勢は波乱につづく波乱で、殺伐なムードの中、案外サボリ癖を出しながらゆるゆるとやって行くのが良いのかも知れません。

JAMSの発足

ミッション病院はこのところ、らい病棟建築中で動きが取れず、この数カ月はアフガン人・チームの育成と、ペシャワールのてんかん診療態勢の準備に力を入れてきました。その結果、アフガン人・チームは現在四十四名の大きな部隊として急成長し、名称もアフガン・レプロシー・サービスから Japan-Afghan Medical Service（JAMS）と変わり、国連機関との協力下にアフガニスタン再建の一翼を担うと共に、日本の良心的なボランタリーの受け入れ団体ともなりつつあります。手元に届いた「アフガニスタン復興のための農村医療計画」は、彼ら自身の手になるものです。（次頁）

これは、らい多発地帯の山岳農村部に積極的な医療・保健活動を展開し、恨みのらい震源地の息の根を止めることにもなります。七月から二カ月間の綿密な調査を組織して企画を具体化し、今年の夏からサブセンターの配備と試行錯誤を開始するそうです。私は単にオブザーバーの役で、非常に

重要な役を果たしている訳ではありませんが、どうぞ彼らの国土再建の情熱にご声援下さい。

JAMSのメンバー(左から6人めが中村医師)

てんかん診療の意気上がる

てんかんの方は、これまで一年半以上にわたって、ペシャワール大学の主に精神科と協力して臨床カンファレンスを重ね、神経病学の向上に力を注いできました(これは余り怠け癖を出せませんでした)。かいあって、今回ペシャワール会から待望の脳波計がJAMSを通じて大学病院の精神科に送られる事になり、精神科教授以下、大変な喜びようでした。(それまで、ペシャワールには何と脳波計もなかったのです。一つは脳波を読影できる人材がなかったので、粘り強くカンファレンスを続けて読影技術を伝えました)。

脳波計は三月十四日に合法的な手続きを終えて受け出され、現在精神科から医師たちが操作方法をJAMSのスタッフたちから習っています。習熟した後に、ラマザーン前に正式に引き渡されます。ちょうど佐藤雄二先生が昨年四月精神科を訪れ、シャフィーク教授と約束してから一年目、感無量です。

これにて、てんかん診療の意気はますますあがり、引き続き脳波カンファレンスを続ければ、極めて有効な技術協力となります。いままでおろそかにされがちであった、てんかん患者たちに少しずつ大きな恩恵がゆきわたることでしょう。

また、今年になって、ミッション病院とJAMSに「てんかんクリニック」が開設され、延べ診療数約三千名、現在数百名が定期治療下にあり、パキスタン・アフガニスタンの多くの患者たちに励ましを与えています。どうもご協力ありがとうございました。脳波計を寄贈された福岡・北九州のソロプチミストの方々に、心からの感謝の意をお伝え下さい。

カイバル峠の向こう側ジャララバードでは激しい戦闘が続いており、三月に入って、負傷した瀕死の戦闘員を満載した車がペシャワールを行き来しています。パキスタン側では、例の予言者モハメッドを誹謗した出版物で反米暴動が頻発。ペシャワールの英国領事館も爆弾で吹き飛ばされました。アフガニスタンの「戦後処理」も米ソの思惑がからんで、抗争と混乱の巷です。平和はまだ遠いです。

ではまた、とりあえず。皆様もお元気で。

一九八九年三月二十五日

アフガニスタン復興のための農村医療計画

JAMS　責任者　Dr.シャワリ・ワリザリフ　医療顧問　中村　哲

まえがき（一部省略）

（ソ連軍撤退以降）今まで難民援助団体として活動してきた各国NGO（非政府団体）は、活動の中心をアフガニスタン内部に移動し始めた。彼らの活動は、農業・医療・教育分野の多岐にわたり、幅広い分野で国土再建の主力となりつつあるが、日本のNGOの活動は他国に比すれば皆無に等しい。また、日本が他国を凌ぐ援助をしていると言っても、主として国連を介する技術・財政援助に限定されており、それがどのように機能しているかは余り知る者がいない。

このような中で、現地事情に沿った有効な援助を我々自らで組織し、たとえ小さくとも一つの範となりうる援助の形を身を以て示す事が求められていると思われる。我々の活動規模は他の欧米諸国のそれと比ぶべくもないが、敢えてそうしてこそ、将来アフガニスタンと日本との真の友好の絆が培われて行くものと信ずる。

我々は、決して金や物資に飢えているのではない。祖国アフガニスタンは米ソの弾丸で蹂躙されたかと思えば、今度は国際援助という名前で不必要に注がれる金によって蹂躙されようとしているからだ。我々は心のこもった真の友好と平和の絆に飢えているのである。長いことロシアと欧米勢力の暴虐と干渉にさらされてきた我々アフガニスタンの人々にとって、日本は今でも一つの輝かしい希望である。たとえ片思いであっても、これは決して誇張や世辞ではない。日本の心ある人々との協力を我々は誇りを以て感謝している。この、温かい友好と協力の輪が広がってゆくことを願ってやまない。

I　援助活動の概要

(1)　活動母体は日本―アフガン医療奉仕団（Japan-Afghan Medical Service）である。この前身は、一九八六年以来日本側の民間援助で支えられてきたAfghan Leprosy Serviceで、パキスタン政府公認の独立した難民医療団体であり、ACBAR（民間のアフガン難民援助団体協議会）に属し、UNHCR（国連難民高等弁務官）とも緊密な接触を持っている。

(2)　本計画は、アフガニスタン難民のための医療援助活動を、現在の「難民救済活

動」から更にアフガニスタン内部へ拡大発展させ、北東部の農村復興に医療側から積極的に協力するものである。

(3) 従来主たる診療対象であったらい病のみならず、他の一般的な疾病をも診療し、さらに北東部山岳地帯の無医地区（バダクシャン、クナール、ヌーリスタン、バンジシェールなど）の二十カ村（人口各一、〇〇〇―五、〇〇〇家族）を対象にして、モデル的な医療協力態勢を作り上げる。

(4) このため、各村より一名、計二十名の候補者を選び、短期の診療員養成コース（六カ月）をペシャワールの本部に開設、所定の徹底した訓練を施して各村のサブ・センターに配置する。各診療員はペシャワールのセンターとの緊密な連絡の下に各村の保健衛生状態の改善に力を注ぎ、以て自分の村の復興・建設に協力する。

(5) 医療と切り離せぬ他のプロジェクト、とくに伝統的な水利施設の再建・充実は急務であり、本計画の一部として関係者の協力の下に積極的に取り組む。

(6) 諸外国のアフガン難民援助の弊害は、しばしば地元（パキスタン北西辺境州）の同様に貧困な状態を等閑視してきたこと、アフガン人の一部に外国への依存体質を作り上げてきたことである。

我々の活動はペシャワールや北西辺境州住民にも益あるよう配慮し、依存体質の助長を極力排除して、「自立への援助」を固い方針とする。また、諸外国のNGOと異なって、我々はいかなる政治・思想・宗教的な意図を持たず、医療人として厳正中立で臨む。

(7) 一九八九年一月より訓練コースを開設、一九八九年夏より各村に診療員の配備を開始、試行期間を二年間とし、良好な結果を確認してから拡大を図る。

（以下次号に続く）

急告

JAMS発

良心の弾丸をペシャワールへ

去る2月15日、待ち望んだソ連軍の撤退が完了したと伝えられました。日本側ではソ連軍撤退＝和平の到来と受け取られがちでありますが、混乱はここしばらく数年以上は続くものと思われます。事実、難民は現在むしろ増加しているのです。

他方、アフガニスタン復興のための援助活動は欧米・アラブ各国の民間を中心に大掛かりに組織されようとしております。一部には「アフガン難民は他の難民に比べればマシである」とか、「アフガン難民援助は政府のお先棒を担ぐものである」とかの風評もありますが、これは紙の上でしか実情を知らぬ独善的な意見です。実際に目前で起きている実情を見て下さい。手をこまねいて見るに忍びません。

アフガニスタンの荒廃は凄惨なものがあり、その再建は長い長い歳月を要するでしょう。死者最低百万人といわれますが、これは極めて控え目な数字です。日本政府も国連機関を通じて積極的に本腰を入れつつあります。しかし、やはりきめの細かい支援というのは、現地事情を熱知した民間の我々しかできぬ事もあります。何よりも、「政府がやってるのだから我々が何も……」というのでは余りに寂しい気が致します。

既に皆様にお知らせしたように、心あるアフガンの人々は決して金や物に飢えているのではありません。心のこもった温かい友情に基づいた協力に飢えているのです。Japan-Afghan Medical Serviceは、短期・長期を問わず、日本のボランタリーを受け入れる用意があります。**医療関係に限らず、英文の事務、連絡通信係、情宣係、夫々のタレントに応じて協力して下さる方を歓迎いたします。**私達の活動は、決して大きなものではありませんが、小さくとも温まる手作りの良心の灯を絶やさぬよう、この危急時にこそ力を合わせようではありませんか。

志があっても、なかなか身動きのとりにくい日本の事情はよく解っております。現地に出れぬ方は財政援助でも祈りでも、何でも結構です。どうぞ私達の活動をお支え下さい。ペシャワールから、切に皆様のご協力を訴えます。

1989年3月22日

Japan-Afghan Medical Service

責任者　Dr シャワリ・ワリザリフ

（JAMSの活動にご協力下さる方はペシャワール会事務局までご一報下さい。募金の場合もその旨ご明記下さい。なお、JAMSでは、アフガン・ジュータンのワーク・ショップも始めました。年間製作能力は5枚です。併せてご協力下さい。）

「ペシャワールの石松医師を支える会(略称)」大分で発足

＊　＊　＊

会報18号で紹介しました、大分の医師石松義弘さんは、医療協力のため、去る四月十七日、ペシャワールの中村先生のもとへ無事出発されました。

この石松さんを物心両面で支援して行こうと、彼の勤務先であった「天心堂へつぎ病院」の方々を中心に、大分で「ペシャワールの石松医師を支える会(略称)」が発足しました。

今回は、この大分の「支える会」のパンフレットより、趣意書及び、石松さんの出発を前にしての弁を転載させて頂き、六年目を迎えようとする私達「ペシャワール会」も、もう一度、発足当時のあの熱い想いを想い起こし、同時に、中村先生の言われる「有名無名を問わず、小さくとも多くの良心を束ねることによって、心を温める手作りの灯(『ペシャワールにて』あとがきより)」が継続し得て来たことの意義を再確認する機会にしたいと思います。

大分の皆さんの「支える会」の発展を、心より応援すると共に、互いに協力を惜しまずに行きたいと思います。

＊　＊　＊

「ペシャワールの石松医師を支える会」趣意書

この二年間、特定医療法人天心堂へつぎ病院（大分市）のプライマリーケア実践の中で、卒業研修を積まれた石松医師は、来たる一九八九年四月、アフガニスタン難民救援救ライ医療のため、荒涼としたパキスタン内陸北西端のペシャワールに出立されます。

御存知のように、現地は未だ戦塵収まらぬどころか、一触即発の緊迫した状況にあります。九年余の外国軍隊の侵略と、打ちつづく内戦のために、多くの人家や町が破壊され、生命線ともいうべき乏しい耕地や水路もズタズタに引き裂かれ、その結果一二〇〇万の総人口の中、実に一〇〇万人の戦死、五〇〇万人にものぼる人々が難民化し、国境をこえて流浪しているわけで、その復興には何十年かかるか想像もつかないということです。

さらに悲惨なことには、戦禍や飢餓にくわえて、急性伝染性疾患、結核やライなどの慢性伝染性疾患が蔓延し、地域社会の復興の大きな妨げとなっています。

世界で最も多い難民を出しているこの地

「石松医師を支える会」パンフレット

域に、日本からは僅かに一名の医師が、六年前から派遣されているにすぎません。石松医師は、この医師（中村哲先生）と協力しながら、ペシャワールの病院を拠点に、アフガニスタン復興のための農村医療計画の礎石になって働こうと志されています。

丈夫四海に志さば
　万里も猶　比隣の如し（魏・曹植）

壮快な青年の志に、彼は何らとくに気負うところもなく平々且々として任に赴こうとしています。世界の難民の対極にあって、難民のひとつの大きな原因となり続けている日本。

それ故にこそ経済大国として巨大に成長しながらも難民のためになすことの極端に少ない日本から、一人の青年医師が、今このように船出しようとしています。

私達もそれぞれの関心と寸志を持ち寄り、この〝支える会〟をつくり、石松医師の現地での活動を、物心ともにささやかながら持続的に支えてゆきたいと思うのです。

多くの皆様がこの趣意に賛同され、ともに石松医師を支援されんことを、喚びかける次第です。

＝会則の一部＝

〈事業〉本会は、本会名称の主旨のもとに、石松医師を通じて現地のことを知り、石松医師を通じて現地の人々の自立的復興と発展を支援し、私達の日常生活のあり方をみなおし、必要な情報宣伝、募金活動を行う。

会員はそれぞれの可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

〈会費〉本会は主として個人会費に依拠して運営される。会費は学生会員は年額一口一、〇〇〇円(以上)、一般会員は、年額一口二、〇〇〇円（以上）を納入する。

壮行会で花束をもらい照れる石松さん

▶壮行会に集まった60人余りの人々に現地の説明をする石松医師

「ペシャワールの石松医師を支える会」
連絡先：大分市中戸次（へつぎ）5158－2
天心堂へつぎ病院内
☎（0975）97－5551
（担当・小畑貴子）

なぜ行くのか

石松義弘

私はどのようにして他の人の役に立てるのだろうか。人は、その人の置かれた立場や環境に従って、役に立つことをすればよいと思う。困っている人は日本にだって沢山いる。しかし、困っている人が最も多い場所へも努力すれば行くことが可能である。誰かが行くべきであり自分が行けるのなら行こうと思った。

第三世界を旅すると、自分を取り戻したような気になることができる。それは、その地で暮らす人々の素朴な人間らしさがそうさせるのだと思う。なにも善人ばかりがいるというわけではなく、弱さやずるさを含んだむき出しの人間らしさなのである。

その人々が、今、飢餓と病気と戦禍に苦しんでいる。貧しさは今にはじまったことではないが、その困難さは年々大きくなり、展望のない行き止まりに近づきつつある。ヒンズークシュ山脈の遙かに白く輝く山稜や青い空と対照的に、強烈な日射しと砂埃の中で、人々は飢え、疲弊し、襤褸の如く死んでゆく。

私たち日本を含めた先進国といわれる国の人々の生活と、打ちひしがれた彼らのみじめさと悲しみの間に横たわる不条理が、私が医師としてペシャワールに行く理由の一つである。

もう一つの理由は、私自身の生き方の問題である。かつて私は登山家になろうと思っていた。高校生のころである。美しく厳しい自然の中で、生

▶学生時代の石松さん（ネパール）

▶石松さんが写した難民の子どもたち

きているという事を確かに感じながら山に登っていた。しかし、人が互いに支えあう存在であることに気がついたとき、考えは変わっていった。

ヒマラヤ山麓のネパールの小さな村で、一人で旅行中に病気になったことがある。町まで歩いて一週間はかかる、電気も水道もない数軒の農家があるだけのところだ。発熱と下痢に数日間苦しみ、動けなくなった私を介抱してくれたのは、激しい農作業と貧しい食事にやせ細った農婦だった。話すべき共通の言葉もなく、背負っている運命や社会も異なる人なのに、私をみつめる瞳の奥から伝わってくる温かみに、大切なことはこのようなことだと思った。人は互いに支えあうことによってのみ生きうるのであり、まぎれもなく自分も他の人々に支えられて生きているのだと思った。

私は、どのようにして他の人の役にたてるのだろうか。人は、その人の置かれた立場や環境に従って、役に立つことをすればよいと思う。困っている人は日本にだって沢山いる。しかし、困っている人が最も多い場所へも努力すれば行くことが可能である。誰かが行くべきであり自分が行けるのなら行こうと思った。自分の夢のため、自己実現のために、とも言えるかもしれない。また、自己を失ってはじめて得られるものがある、そのために行くのだとも言える。どちらでも良いと思っている。

アフリカの難民キャンプに行ったことがある。本当に飢えた人の目は、うつろで光がない。何もこちらに訴えかけてこない透明なガラス玉のようである。そんな目をみるとき、飢えていない自分に対するうしろめたさだけではなく、自分は、人間としてどう生きるのか、自分に問いかけざるを得なくなる。こちらの心をうつす鏡のようですらある。人間として、医者として、誰のためにどう生きるのかという問いへの私なりの答えが、ペシャワールへ行くことになったのである。

略歴

1959年　熊本県生まれ。
1978年　済々黌高校卒業。
　　在学中、山岳部で九州や信州の山を登る。
1980年　国立大分医科大学入学。
1982年　タイ、ネパールを3週間ほど旅行。はじめて第三世界の貧しさに触れる。
1985年　アフリカ東部(ケニア、タンザニア、ウガンダ)に行き、難民と援助の問題の深さを知る。帰国途中に寄ったパキスタンのアフガン難民キャンプで中村哲医師と出会う。
1987年　大分医科大学卒業。
　　天心堂へつぎ病院にて外科、内科の研修開始。
1989年4月　パキスタンのペシャワールへ出発。

●女性の目でみたペシャワール

伝統的習俗と医療の矛盾の中で

ペシャワール会事務局　安部　美智子（看護婦）

私がこのペシャワールに来て、またたく間に六カ月が過ぎ、十月当初の埃にまみれた無味乾燥な風景も、今は日本で言う初夏を迎えました。あたり一面黄色のデージーの花が咲き乱れ、花橘の香りも漂い、一歩郊外に足を運べば、青い麦や新緑が朝日に照り返る一年中でいちばん良い季節となりました。

◎レプロシー病棟での医療活動

私の勤務先は皆さんご存知のように、病床数約百五十床のペシャワール・ミッション・ホスピタルのレプロシー病棟です。約五十床の新病棟が昨年七月より、建設中のため、以前使用していた病室が数室壊され、現在、二十六床、ベランダを使っても三十床までが限界という小規模医療機関です。

スタッフはレプロシー・テクニシャンとして教育を受けた三名の看護士と資格を持たない一名の助手、それに現在病気療養中の門番で構成されています。そして一名が外来担当、二名が病棟を担当しています。

私の主な仕事は、足底潰瘍を持つ患者の包帯交換、損傷部の洗浄、傷周囲の角質化・腐敗した部分の除去、時にはウジ虫の湧いた傷の消毒などに大部分を費やして、その後に与薬、配膳、体温表の点検、スタッフが受けている中村先生からのオーダーの点検、週一回のＪＡＭＳでの中村先生の手術介助などを行っています。仕事量はレプロシーが慢性疾患ということもあり、日本と比べようもなく少なく、記録物といえば、体温表、来院当初の病歴記載、その他病棟日誌もどきの簡単な患者の病状記録のみで、日本で記録の必要性をたたきこまれた私としては、嘘のような状況です。医療機器の不備も目立ち、消毒用のカスト、ピンセットは錆びつき、医術用のハサミは切れが悪く、角質部を削るカミソリもシャープさに欠け、ガーゼは目が荒くて薄いと、最先端を行く日本の医療機器に比較すると、難点をあげればきりがありません。

またスタッフの看護のレベルも、消毒後何日たったかわからない注射器やピンセットを使用するなど、日本では考えられない現状で、口を酢っぱくして説明したあげく、やっと実行するといったぐあいです。この程度の事は、日常茶飯時で、他の公営病院でさえも治療は杜撰で、私達の病院のスタッフの技術に及ばず、公営病院からギブス巻きの依頼を受ける患者は、感染だらけの潰瘍持参で来院し、為すすべがありません。

◎チャドルと女性患者

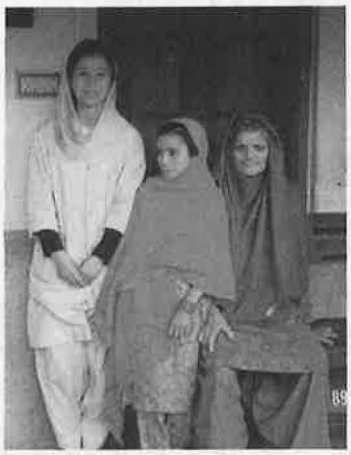
つぎに、私の一番の関心事は、私と同性である女性の社会的立場、生活風習でした。イスラム教を基盤としたお国がらだけに、原則として肉親以外には、肌を見せてはいけないことになっています。目の部分だけ

がメッシュになって見透しのきくようになったシーツのようなブルカという布を頭からすっぽりとまとった女性、あるいはチャドルという大判のスカーフを目の部分を除き巻いている忍者まがいの女性、といった伝統的な服装は近年減少し、マチコ巻きスタイルが一般的なのですが、しばらくは盗賊のイメージが抜けませんでした。ついでに言うと、逆に男性の立場でこのスタイルを見ると、布の下の秘められた貴婦人の姿を想像するのだそうです。

この肌を見せてはいけないという風習は、医療において弊害を浮きぼりにしています。女性患者の場合、男性スタッフには服から出た頭部、手先、足先のみしか見せようとしませんし、またスタッフの方も観察を躊躇します。この風習のせいで手遅れになって、診察に来るのも希ではありません。二カ月前ちょうど私が休暇中に、老婦人が転倒し骨折を起こし牽引治療を始めたのですが、アフガン難民のその患者は床擦れをおこし、家族も離れていたため排尿介助をする人もなくセーター・チャドルをおむつ代わりにあてがい、尿にまみれてベッドに横たわっていたという悲惨な状況でした。男性スタッフだけですので女性患者への観察がおろそかになったのは責められませんし、女性用の尿器さえもなかったのですから無理もありません。仮にあったとしても男性が介助する訳にはいかないのです。この患者ばかりではありません。手術後、何日も体を拭くこともなくベッドに臥せている女性もいます。今はただ、私が去った後、この恥じらい多き女性患者たちのために女性スタッフが配置されることを願うのみです。

◇「男女席を同じうせず」

戦前まで「男女席を同じうせず」と日本で謳われたように、教育機関は共学の学校が少なく、農村地域では女子は家事や子守に忙しくて、就学のチャンスにさえ恵まれていません。レストランでの飲食も女性同伴者用に、店内の奥に仕切られた場所が設置され、病院の待合い室も別々ですし、結婚披露宴も分離して行われます。これは慣れない私達には、とても奇妙に見える光景です。職業を持った婦人は少なく、結婚後は家庭に納まるのが一般的で、医療従事者、教職員を除き、オフィス・レディは限られています。最近、私の知り合いで事務員として働いていた若い女性が、外で働いてはいけないと諭され辞職しました。街中の食料品店、洋品店、レストラン、銀行などの窓口で、私は一度も女性の事務員を見たことがありません。総て男性です。一部の女性はパキスタンには自由がないので、将来外国で働きたいと望んでいますし、かなりの若者が、実際に外国への出稼ぎ労働者として、おもにアラブ諸国で職を得ています。将来、女性の権利について理解のある政治家が出れば、少しは変わるかもしれませんが…。毎日の食料品、日用品の買い出しも男性です。とは言っても、街で全く女性を見掛けないという訳ではありません。少しずつ外出のチャンスも増えているようです。そして、化粧品、衣類や装飾品を選ぶ時の女性の表情、興味は万国共通です。



病院で仲良くなった患者さんとそのお孫さん。白衣が安部さん

◎混沌は続く

まだ内戦の終結していないアフガニスタンから山ひとつ隔てたここペシャワールでは、各ゲリラの参謀本部が、祖国のための聖戦と銘うって連夜戦略を練り、その犠牲者として激戦のジャララバードから負傷者が次々と運ばれ生死の境をさまよっています。また一方ではパキスタンの極一部の富む階級が、何かにつけて盛大な宴を催すといった両極端の混沌とした中で、一般市民はなぜか平静を保っているかに見えるという、訳の判らぬ政情下で暮らしてみて、私は、宇宙規模的な他力本願的運命や、そこらの蟻規模の自力本願的な生の営みを垣間見た気がします。ともあれ、中村先生と共に仕事ができ、無害ではあっても決して有害ではなかったことを祈って、近況報告を終わります。

声

いつも暖いご支援ありがとうございます。皆さまのお便りをお待ちいたしております

＊中村先生にお会いした時、深い感動を受けました。これから、お一人でも多くの方々に参加を呼びかけたいと思います。
（東京都　山崎　桂子）

＊会報を有意義に利用させていただいています。ご苦労な作業、感謝しております。北九州での集会を楽しみにしております。
（北九州市　松室　淑子）

＊昨年8月、中村先生に当YWCAでパキスタンでのご活動についてお話いただきました。ソ連軍引揚げ後も難民問題はまだまだ解決しそうにありません。先生のご活動の一助にお使い下さいませ。
（神戸市　神戸YWCA）

＊中村先生が助けをもとめている多くの人々のためにご健康でお働き下さいますようお祈り申し上げております。
（福岡市　吉田　栄子）

＊主のお働き感謝致します。主が共に歩まれている事を信じ嬉しく思います。
（佐賀県　原　さよ子）

＊中村先生をはじめ御活動されている皆様くれぐれもお体に御留意下さり御活躍下さい。
（福岡市　西田　哲朗）

＊並大抵でない現地での御活動、本当に頭が下ります。皆様健康に気をつけられ、お仕事が充実しますよう、お祈りいたします。
（柳井市　片山　恭子）

＊先生の御健康とペシャワールでの良き働き人が育ってくださるようにお祈りいたします。
（太宰府市　廣門　繁子）

＊中村先生ご一家の御健康と奉仕の内容の益々の御発展をお祈りいたします。
（粕屋郡　長尾　花子・香代子）

＊ペシャワール会の御発展をお祈りします。まことに小さな力ですがJOCSを長く応援させていただいております。
（浮羽郡　田村　恵美子）

＊会報No.18の中村哲氏の告発文（私にはそう聞こえました）相変らずお元気で切れの良い文章、山間の田舎に日を暮らす身が恥ずかしくもあり氏がうらやましくもあります。人生、何か他人の為に生きる。これ程の生き甲斐他になしです。
（兵庫県　西沢　美千代）

＊子供たち（小4・小1）にせがまれて会報の内容をわかりやすく聞かせましたら「役に立つのってうれしいね」と言いました。ささやかな気持ちがパキスタンに届くのは本当に嬉しいことです。
（愛知県　中村　祥子）

＊若い諸君のエネルギーに期待します。
（宗像市　長谷川　秋彦）

＊アフガン情勢もあり先生の御無事な御活躍をお祈り申しております。
（愛知県　野田　伊久枝）

＊多くの方々の御支援あればこそ、伜も活動されますので大変感謝申しております。遠くペシャワールの地での伜一家に想いをはせて、この本を読んで感慨もひとしおであります。（粕屋郡　中村　秀子）

＊会報は私達の心をふるいたたせてくれます。
（北九州市　中嶋　義三）

＊以前は名前も知らなかったペシャワールが俄然、世界の注目の的となっており、そこでの中村先生のお働きの上に祈っております。
（粕屋郡　松村　敬成）

＊先日、中村先生のご高著「ペシャワールにて」をご恵送いただき、厚くお礼申し上げます。小さな「ペシャワール」は私共の身辺に無数にあり、本著の中村先生のお働きを通して私共の生き方を示されます。俗悪な出版物の洪水の中で、本著はみずみずしい光を放っている感じがします。一人でも多くの人が読まれることを切望しそのために祈ります。

福岡ペシャワールの会の上に天上の祝福あらんことを。（熊本市　沖津　信子）

☆鎌田啓介さんからの手紙

中村先生がこの街を愛される理由がわかるような気がします。

二月からペシャワールで中村先生のお手伝いをされている医学生・鎌田啓介さんから、手紙が届きました。紹介します。

前略

ペシャワール会の皆様、お元気でしょうか。御無沙汰致しております。連絡が遅れて申し訳ありませんでした。

僕がペシャワールに来てから早くも六週間が過ぎました。この間、幸い腹をこわすこともなく、元気でやっております。中村先生を始め、御家族、安部さんも皆御元気です。

今回、初めての外国でしたが、ペシャワール会報に紹介されている通り、大変になじみやすい街に感じられます。中村先生がこの街を愛されている理由もなんとなくわかる様な気がします。ただ、例年になく雨が少ないという事で、猛烈な土埃とリキシャの排気ガスには、文字通り閉口しております。

知識も技術もない医学生である僕にできる事といえば、らい患者の傷の消毒や手術のお手伝いと、役に立っているとは到底思えないのですが、しかし、僕にとりましては、日本とは色々な面で異なっている医療の実際や、根本である生活環境の違いなどを見ますと、やはり思い切って来てみて良かったなあと思います。良かったなあとは思うのですが、まだそれらについて考えてみるという段階ではなく、ただあっけにとられている、といった所です。

大学の研究室での鎌田さん

ペシャワールにはいつまで居るか決めていません。お邪魔でなければいつまでもここにいたいと思いますし、インドやバングラデシュなどにも行ってみたいとも思っています。いずれにせよ、まだ始ったばかりなので、これから何があるか楽しみであります。皆様も御承知の通り、中村先生のお人柄、楽しい話も沢山あるのですが、また別の機会に紹介させて頂きます。

日本では、そろそろ季節の変り目になるかと思います。皆様どうかお体にお気をつけてお過じ下さい。

敬具

一九八九・三・十七

鎌田　啓介

略　歴

1965.4.1	東京中目黒生まれ
1983.3	神奈川県立横浜翠嵐(すいらん)高校卒
1988	インド方面へ旅行を計画
11	Dr. 中村の話を伝え聞き、ペシャワール会と接触 医療品等を届けることを快諾
1989.2.1	ペシャワールへ出発
1990.3	東北大学医学部卒業予定

●「ヒンディ村――最後の桃源郷フンザにくらして」より

ジャミとヤスミン

絵・山田純子　文・山田純子　山田俊一

隣村に住むジャミは十六歳の時、本家筋の娘と無理強いのように結婚させられたという。数年後、いとこの結婚式に遠くの旧王国ヤシンへおもむいた時、ヤスミンを見染め、恋仲になった。そして、一週間の滞在の間に結婚の約束まで取り交わしてしまったという。

家へ戻ると、今まで父母にたてつくこともなかった彼が、突然のように、今の妻と離婚してヤスミンと結婚する、と言った。ところが、母は嫁の親に顔向けが出来ない、と冬のフンザ川へ身を投げて死んでしまった。

こうなっては、ジャミもどうすることも出来ない。

一方、一途(いちず)にジャミを想うヤスミンは、様々な縁談を断わり通した。ところが事もあろうに、彼女の美しさに惚れて、ヤシン旧王家の息子が結婚を申し込んできた。これには家族も一も二もなく、一方的に話を決めてしまった。だが、当のヤスミンは首をたてにふらない。

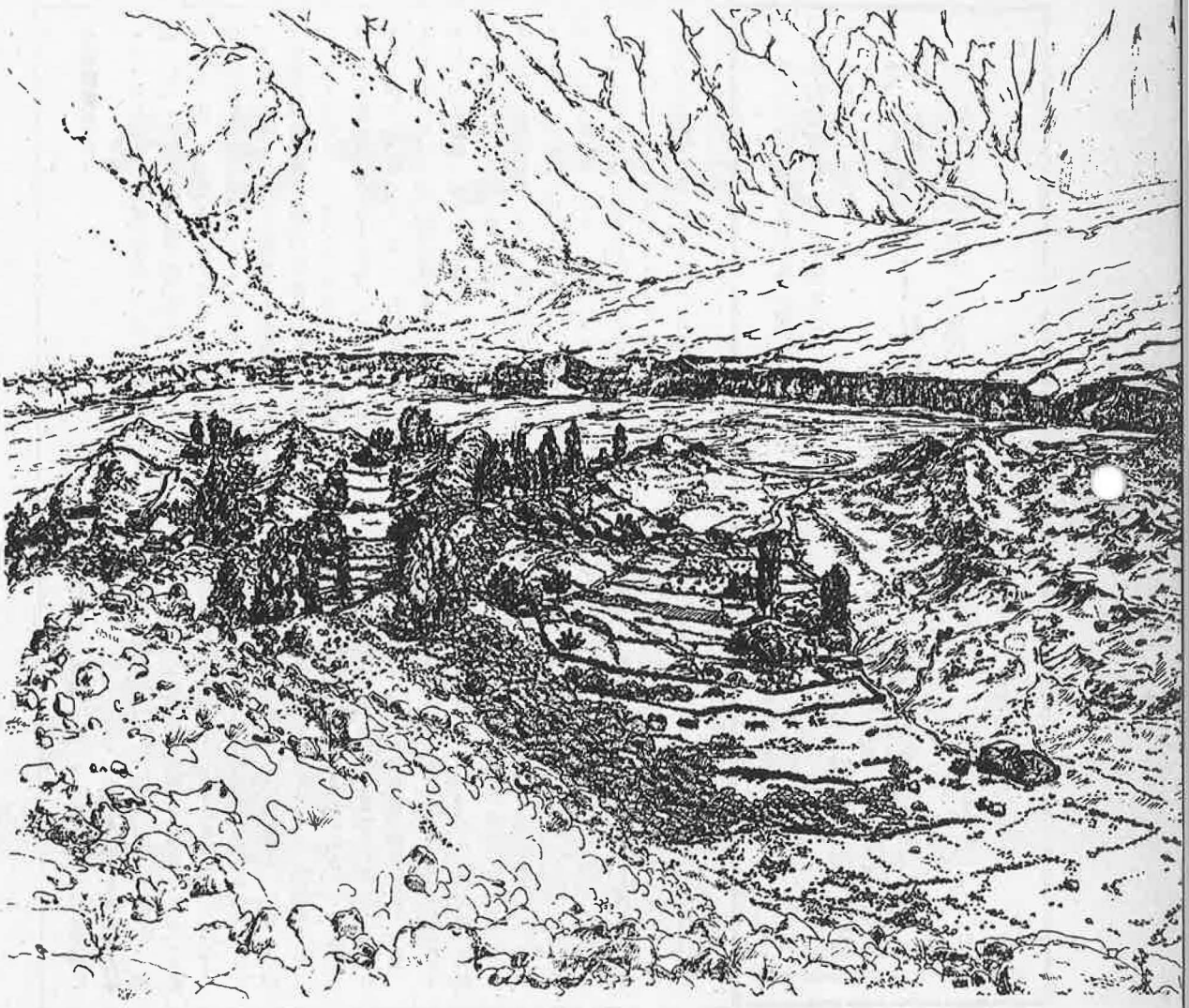
そこで、彼女の兄は友人と連れだってギルギットへ行き、ジャミに妹から手を引け、と迫った。でも、ジャミは手を引くとは言わない。怒った兄は、ジャミの腹を刺してしまった。この事件を耳にしたヤスミンは、DDTを飲んで自殺をはかった。

危篤に陥ったヤスミンは、すぐさまギルギットの病院へ担ぎ込まれた。これを聞きつけたジャミは、彼女を連れ出すと、官立の病院より信用のある開業医にみせ、遠くの都会からも金にあかして薬を取り寄せ、介抱に専念した。その甲斐あってヤスミンは回復した。

娘は死ぬものと覚悟していた親たちも、ジャミの一途な姿を見て、ここまで思い詰めているなら、と結婚を許した。ジャミは、ただちに一年分の給料の額にあたる八千ルピーを結納として納め、実家へ戻った。

ところが父親は、

「五年前に母を殺しておいて、お前はまだ



懲りんのか！　わしは死んだ母にも、本家にも、近所にも合わせる顔がない。お前が結婚するというなら、母と同じように死ぬしかないわい」

数日後、ジャミはギルギットで身辺の整理をすませて実家へ戻った。この時たまたまギルギットに用のあった私は、行きも帰りも彼のジープに乗り合わせた。彼は途中、親戚の家に乗りつけて客にお茶をふるまった。帰りの道では、老婆を乗せて金を受け取ろうとせず、「元気でな婆さん」と声をかけたのが印象に残っている。

彼はその夜、ライフルで自分のこめかみを撃って死んだ。

ヤスミンへの遺言に、「結納金を納めてあるから、自分の一族と結婚してくれ……」とあった。

一カ月ほどして、ジャミの死を知ったヤスミンは、強力な殺虫剤を飲んで死んでしまった。

その数カ月後、心労のためか、ジャミの父も他界した。そして、ただ一人残されたジャミの妻は、夫の一周忌が済んだ頃、他村で再婚したと聞いた。

（『ヒンディ村』は石風社より出版されています）

●事務局だより

＊アフガン紛争が終結に向かい、テレビなどでもしばしばペシャワールの様子が出るようになりました。しかし、中村先生によればアフガン難民の問題解決は、これから始まるとのことです。それに合わせるように、中村先生の下に現地の人が集まり、自分達で問題の解決に取り組み、日本からそれに協力するというＪＡＭＳ（ジャパン・アフガン・医療サービス）の活動も開始されました。これは、中村先生六年目の新たな出発です。幸い、石松医師をはじめ日本から中村先生の所に赴く協力者も少しずつ増え、それと共に理解の輪も大きくなっています。今後ともご協力を切にお願い致します。

＊更に、ご報告を致します。神戸在住の加藤加代子さんより、結婚四〇周年の記念にと、多額のご寄付をいただきました。また、松本ミツさんからは、亡くなられたお母様の意志として、ご香典を活動資金にといただいております。このような温かいご厚意が活かされるように努力してまいります。

＊中村先生の著書『ペシャワールにて』が全国的に反響を呼びつつあります。共同通信で全国の地方紙に配信されたのをはじめ、地元『西日本新聞』一面のコラム、そして『読売新聞』の一面コラムでも取り上げられました。もちろんマスコミだけではなく、会員の方々をはじめ、本を読まれた方々のクチコミで、次々に読者が拡がりつつあります。行きつけのカレー屋さんの従業員の女性に、「二度読みました」と言われた時には、感激してしまいました。本の売上げの一部は中村先生の活動資金としても生かされますので、さらなるクチコミＰＲをお願いいたします。

＊最後に、前回の会報で報告しました血液分析器をペシャワールに持参した宮原昇さんの報告は、若松ロータリー・クラブの活動の一環であり、その旨の報告が落ちていましたので、お知らせ致します。関係者の方々にご迷惑をおかけしたことについて、お詫び申し上げます。

【作業場　中央区大名一―一〇―二五　上村第二ビル三〇七号　☎（〇九二）七三一―二三七二】

＊ＦＡＸがつきました　（〇九二）七二二―四九一〇

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ

中村哲著　四六判上製二二〇頁　一五〇〇円

ペシャワールにて

――癩（らい）そしてアフガン難民

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、難民、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。（著者「あとがき」より）

石風社（せきふうしゃ）

福岡市中央区大名１－２－15

電話092(714)4838　振替福岡4-25227

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、ＪＯＣＳの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。

③本会は、派遣母体であるＪＯＣＳを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。

④会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑤会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。

⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。

⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
役員の改選は毎年総会にて行う。

⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。

⑨本会の事務局を福岡ＹＭＣＡ（〒八一〇福岡市中央区天神一丁目10の24福岡三和ビル４Ｆ　☎七八一―七四一〇）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区天神１丁目10-24福岡三和ビル４階福岡ＹＭＣＡ内

☎（092）781-7410　ＦＡＸ（092）712-4223　郵便振替 福岡9-6559

事務局長 佐藤　雄二

発行年月　1989年５月20日　№19